

Ⅲ 町の産業

下のグラフは、昼間坂城町で働いている人がどんな仕事をしているかを表したものです。1960（昭和 35）年ごろは、町の半分以上の人が農業で生計を立てていました。その後、農業をしながら工場などで働く人（兼業農家）がどんどん増え、農業の町から工業の町へと変わってきました。今では全国的に「工業の町坂城」の名が知られ、中小の工場がたくさんあり、県内町村ではトップレベルの工業力を持っています。

農業においては、かつての桑畑が果樹園に変わり、高品質のりんご、ぶどうの産地として知られています。

また、今は少なくなりましたが、花き栽培が広く行われていました。

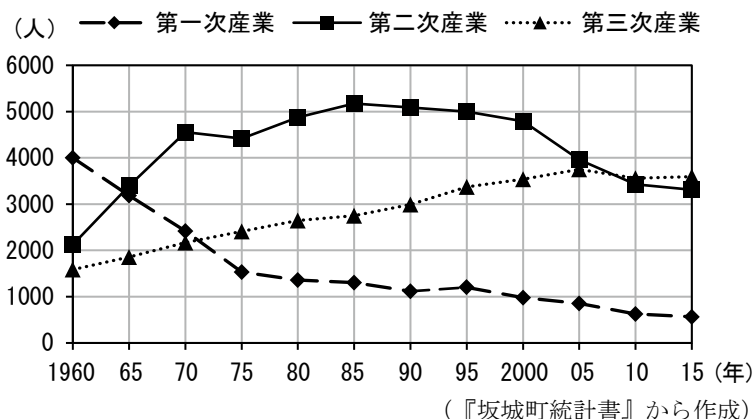
ねずみ大根は、古くから一部地域で栽培されてきた「中之条大根」がもとになっていて、辛味を生かした郷土の伝統料理

「おしぼりうどん」などに使われ、町外から訪れる人にも親しまれています。

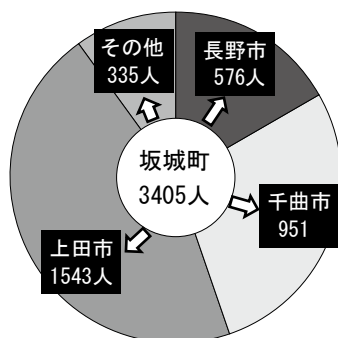
商業においては、大型店が周りの市にいくつかできて町内の店の経営は厳しくなっています。そこで、坂城駅周辺では、鉄の展示館、坂木宿ふるさと歴史館、けやき横丁などの施設を整備し、イベントや各種事業を行い、以前のにぎわいを取り戻すための工夫をしています。

このように、町の人々による日々の工夫と努力の積み重ねによって今日の坂城町の産業が創り上げられ、その地位を築いています。また、下のグラフのように、人口の動きを見ると、坂城町から町外に働きに出ている人の数は 3405 人ですが、町外から坂城町に働きに来ている人の数は 4418 人（2015 年）で、このことから坂城町の産業が盛んなことがわかります。

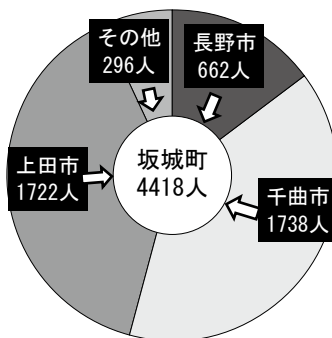
坂城町の産業別人口の変化



坂城町に住んでいて町外で働いている人の数（2015年）



町外に住んでいて坂城町で働いている人の数（2015年）



（2015年『国勢調査』から作成）

1 坂城町の工業

(1) 工業の町坂城

① たくさんの工場ができたわけ

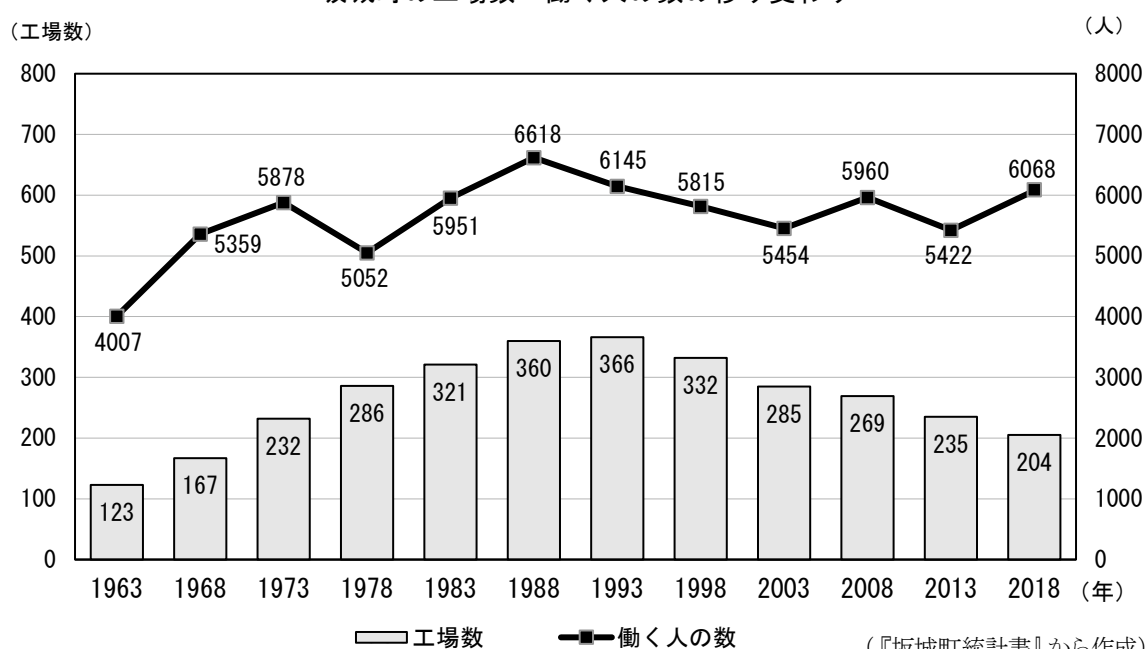
下のグラフからわかるように、現在坂城町には200以上の工場があり、たくさんの人々がそこで働いています。工場のある場所は、1960（昭和35）年ごろまでは桑畑やりんご畑であったところが多かったと言われています。なぜこんなにたくさんの工場ができたのでしょうか。

それは、1941（昭和16）年、坂城町が東京から宮野鑛工場を招いたことから始まります。この年に太平洋戦争が始まり、戦争が激しくなると戦災をのがれるために、東京から坂城町にいくつかの工場が疎開（避難）してきました。その後、町の政策により工場を坂城町に呼んだり、大きな工場で知識や技術を身につけた人々が自分で工場を始めたりしたことで、工場がどんどん増えていきました。

そして、機械・金属加工を中心に、様々な技術を持つ工場が集まり、独自の技術と工夫により特色ある工業の町として発展してきました。

最近では、国際的な競争が激しくなったり、人口が減ったり、少子化や高齢化が進んだりして工場の経営は厳しくなっていますが、工場同士や大学・国・県の研究機関との連携を強くし、新製品の開発や人材育成に力を入れて創造的なものづくりに取り組んでいます。

坂城町の工場数・働く人の数の移り変わり

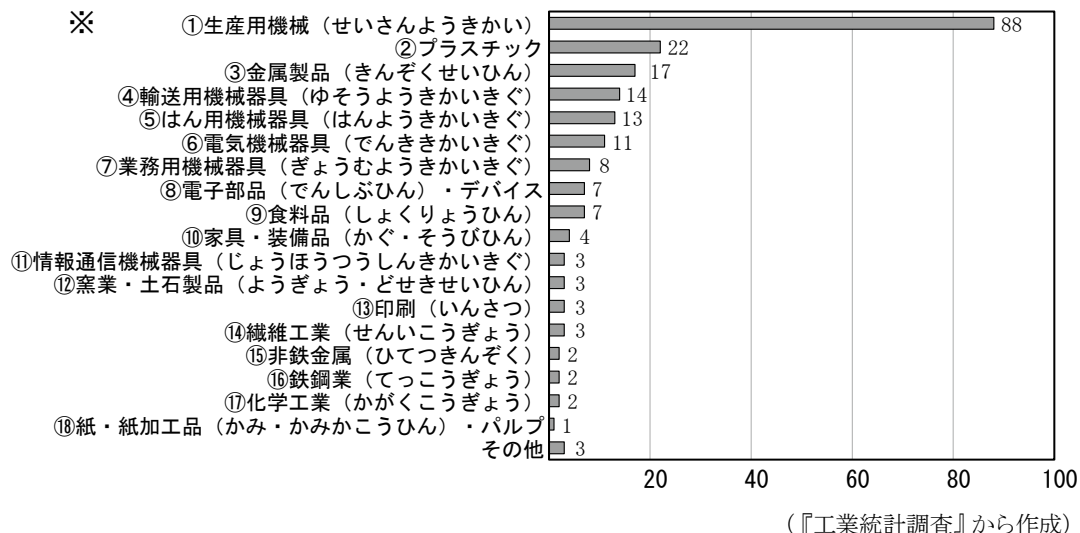


② 坂城町の工場の特色

ア 坂城町に多い工場の種類

下のグラフからわかるように、坂城町にある工場の半分以上は工作機械や産業用ロボット、金属加工機械、建設機械、農業機械などの生産用機械を作る仕事をしています。特に、自動車・建設機械を作る工場との結びつきが強く、部品関係を中心とした製品作りの仕事が多くなっています。また、プラスチック関係（金型・機械・製品成形）の仕事をしている工場も多く、これは町内にある大きな射出成形機製造工場とのつながりによるものです。

製品種類別の工場数（2017年）

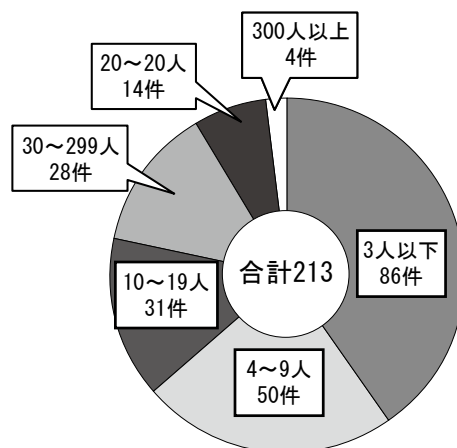


- ① せんぱんやロボットアームなどの工作機械、ミニショベルや油圧ショベルなどの建設機械、プラスチックの加工機械、トラクターなどの農業機械など
- ② プラスチックの製品
- ③ 建設機械の部品、ボルト・ナット・ねじ、工具など
- ④ 自動車車体・ブレーキ・エンジン・エアコン、自転車、飛行機など
- ⑤ 油圧シリンダー、油圧ポンプ、変速機、消火器具など
- ⑥ 電気測定器、医療用計測器、半導体など
- ⑦ 精密測定器、医療用品、はかり、拡大鏡など
- ⑧ 発光ダイオード、液晶パネル、スイッチ、コネクタなど
- ⑨ チョコレート、ジャム、みそ、漬物や山菜の加工食品など
- ⑩ タンス、戸、ふすまなど
- ⑪ 火災報知器設備、マイクロホン、アンテナ、携帯電話など
- ⑫ ガラス容器、砂利
- ⑬ 印刷物
- ⑭ 織物、ふとん、タオル、カーテンなどの布製品
- ⑮ 通信ケーブル、電力ケーブルなど
- ⑯ 亜鉛メッキ銅板、鉄鋼切断品など
- ⑰ 石けん、肥料、医薬品、化粧品など
- ⑱ 段ボール、紙箱、掛け軸、障子紙など

イ 坂城町の工場の大きさ

右のグラフからわかるように、坂城町の工場の多くは、働く人が9人以下という小さな工場です。経営者の多くが大きな工場に勤めてからひとり立ちし、自分の工場を立ち上げたものだからです。これらは、自分の家で機械を買い、大きな工場で学んだ技術を生かして、いろいろな工場と契約して仕事をしています。働く人は家族だけという工場もたくさんあります。そして、誠意のあるていねいな仕事ぶりのよさが認められています。工場を続けるためには経営者の日々の努力が欠かせません。

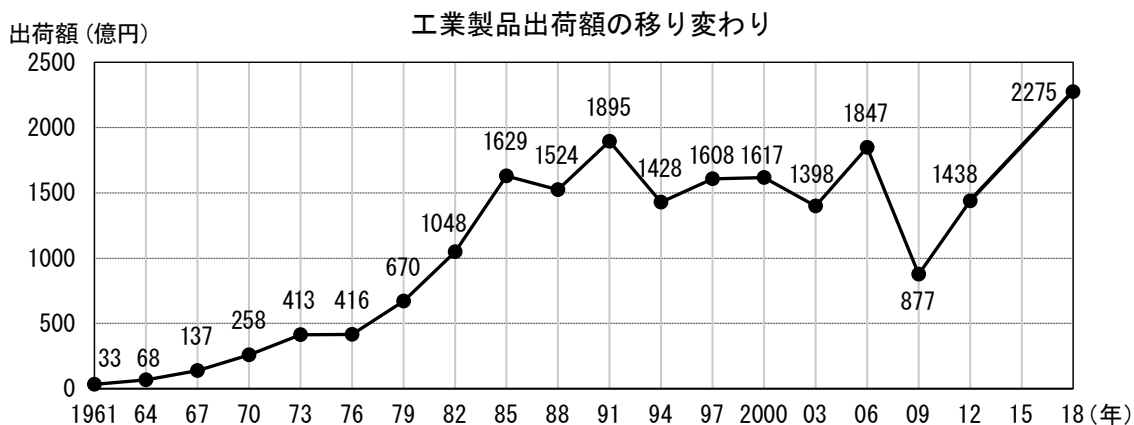
働く人の人数別の工場数（2017年）



（『工業統計調査』から作成）

ウ 坂城町の工場生産額

1963（昭和38）年、123社だった坂城町の工場数は、1993（平成5）年には、366社と目覚ましく増加し、また、下のグラフのように、工業製品出荷額も1961（昭和36）年の33億円から1991（平成3）年の1895億円と飛躍的に成長してきました。ところが、1991（平成3）年をピークに、工場数も出荷額も少なくなる傾向になり、不安定な状況になってきました。そのため、多くの工場では、独自の製品を作ったり、ほかではまねのできない技術で部品を加工したり、さかきテクノセンターやテクノハート坂城協同組合の事業に加わりながら共同で製品を作ったりするなど、工夫と努力によって身につけた技術を生かして工場経営を進めてきています。



（『坂城町町誌』『坂城町統計書』から作成）

（2）特色ある工場

坂城町には特色ある工場がたくさんあります。上のグラフの中で、働く人（従業員）の数が「300人以上」の中から竹内製作所を、「10～19人」の中から大門製作所を例に挙げて紹介します。

① 建設機械を作る工場「竹内製作所」

ア 設計・製造・販売までの一貫生産

竹内製作所は1963年創業の小型建設機械のメーカーです。今から50年ほど前までは、住宅の基礎工事は手作業で穴を掘っていましたが、「せまい場所でも使える小さくて便利な機械を」と依頼を受け、竹内製作所が世界で初めてミニショベル（重さ6トン未満のものをミニショベル、6トン以上のものを油圧ショベルと言います。）を開発しました。

ミニショベルは3000点以上もの部品で作られていますが、部品を作る何百という工場の協力を得ながら、坂城町にある本社工場で完成品を作っています。



ミニショベル

イ ミニショベルができるまで

① 開発

新しい製品を開発・設計する。



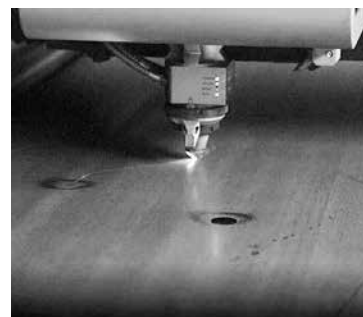
② 試験

新しい製品の試験を行い、合格すると大量生産される。



③ 材料の溶断

部品をレーザーなどにより切り抜く。



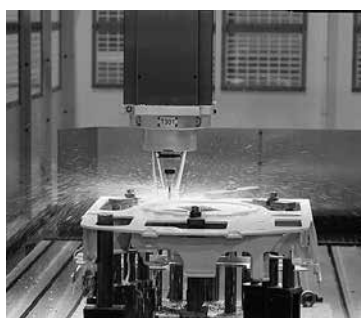
④ 溶接

溶断された部分は、溶接してブーム（腕）などになる。



⑤ 穴あけ・機械加工

工作機械で部品に穴あけや機械加工を行う。



⑥ 組立

加工された部品は組立ラインで組み立てていく。



⑦ 性能検査

組み立てられた製品1台
1台、細かい検査をする。



⑧ 塗装

検査で合格した製品に仕
上げ塗装をする。



⑨ 最終組立

塗装後に残りのパーツを
取り付ける。



⑩ 最終検査

出荷前に、製品の最終検
査を行う。



⑪ 出荷

できあがったら製品をト
ラックにのせて、注文先
へ送り届ける。

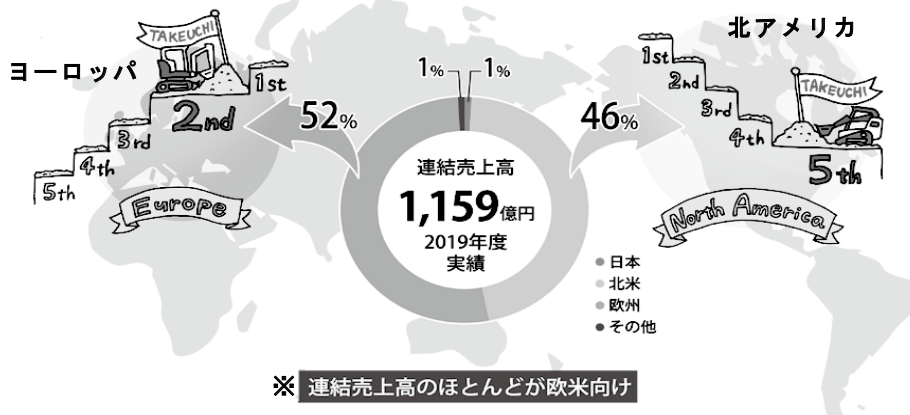


ウ 竹内製作所のグローバルネットワーク（世界的販売網）

竹内製作所の製品は坂城町にある本社工場で完成させた後、製品の約90%以上はアメリカやヨーロッパなど海外に輸出されています。1989（平成元）年の有名な「ベルリンの壁」の取り壊し作業にも、竹内製作所のミニショベルが使われました。海外の様々な気候や環境下でも耐えられるタフな製品づくりにこだわり、次のページの図のようにヨーロッパで2位、北アメリカで5位という世界シェアを誇っています。（出典：Off-Highway Research 社、2020年3月）

ミニショベルは、住宅建築の基礎工事、水道管やガス管などの生活インフラ工事（生活を支えるもとになる工事）などで活躍し、人々の毎日の暮らしを支え続けています。

世界で活躍するミニショベル



れんけつりあげだか
※連結売上高

その会社だけでなく、子会社も含めた売上高のこと

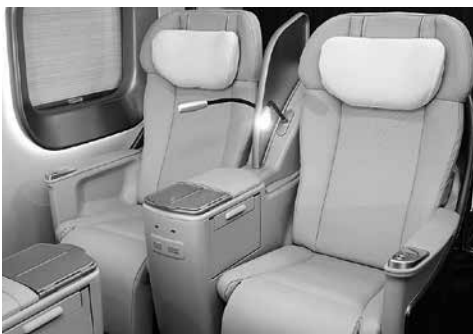
エ 竹内製作所が生んだクローラーローダー

1986（昭和61）年に世界で初めて竹内製作所が開発しました。無限軌道式（いくつかの車輪にベルトをかけ、回転させて走行する方法）で、粘土質の土地や、でこぼこした土地での作業に適しています。粘土質の土地が多いアメリカで、需要のほとんどを占めていることも特徴です。



クローラーローダー

② フレキシブルチューブを作る工場「大門製作所」



フレキシブルチューブを使用した製品

いちばん左の写真は、東北・北海道新幹線グランクラスの座席の写真です。この座席と座席の間についている読書灯は、大門製作所で作られているフレキシブルチューブが使われています。フレキシブルチューブは、どんな角度にも曲げられ、曲げたままの形を保ち、しかも軽くてじょうぶなので評判がよく、たくさんの会社から注文がきています。

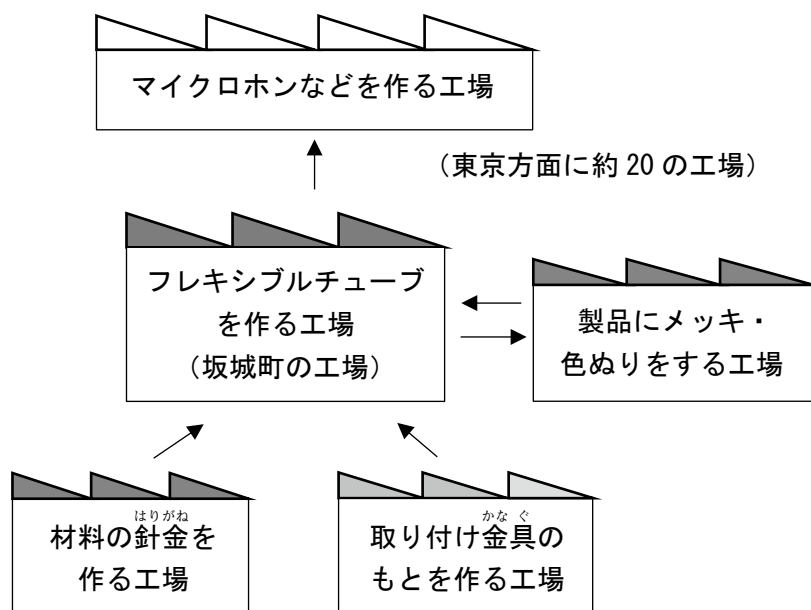
真ん中の写真は、ナースコールの写真です。病院に入院している人が指でボタンを押すことができなくても、センサーで音や息、光、皮ふの接触などを感知し、看護師や医師に呼び出しを知らせることができます。

ア 協力し合う工場

フレキシブルチューブは、右の図のように、いくつかの工場の協力によって作られています。



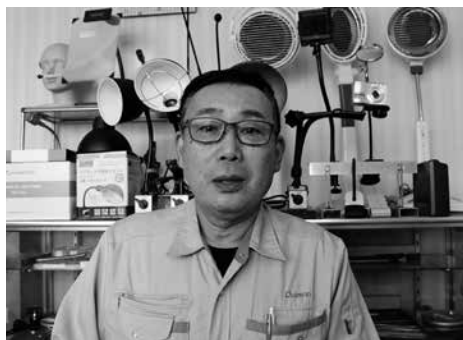
マイクロホン



イ 製品のゆくえ

できあがったフレキシブルチューブは、主に東京方面に出荷され、マイクロホン・ビデオスキャナー・ヘッドフォン・クリップ・ファイバースコープなどに使われます。多いときで、1日1万本ものフレキシブルチューブが送り出されています。

ウ 働く人の工夫と苦勞（社長の宮澤興道さんのお話）



宮澤興道さん

前の社長であるわたしの父の家はりんご農家でしたが、1959（昭和34）年の台風で、大変な被害を受けました。父は、農業をあきらめ、東京の電気メーカーに勤めるようになりました。その会社で、フレキシブルチューブと出会いました。フレキシブルチューブの作り方は大変むずかしく、長年の経験や知識に基づいた技術が必要です。父は、一生懸命修行し、誰にも負けない技術を身につけました。

そして、坂城町にもどってフレキシブルチューブの会社を始めました。おかげで評判もよく、東京や外国の会社からも注文がくるようになりました。一本一本手作りの技術が評価され、父は「信州の名工」にも選ばれました。

わたしは父から会社を引き継ぎ、会社で作ったフレキシブルチューブが、マイクロホンやLEDスタンド、デスクライトのような製品の中に使われていることを誇りに思います。フレキシブルチューブは正直高いですが、それには理由があります。今まで培われてきた技術を駆使し、一本一本のほとんどを手作りで製造しています。ですから、製品の仕上がり、品質に自信を持って製作した製品であり、他社と比べて値段が高くても、実際はそれに見合った適正価格であることを納得され、お客様に購入していただいています。

(3) 工業の町を支えるために

① 公益財団法人さかきテクノセンター

さかきテクノセンターは、坂城町の工業をより発展させ、支えていくため1993（平成5）年にオープンしました。最近の工業技術は、より精密になり、日々高度化しています。

ところが、坂城町の工場の多くは9人以下の小さな工場ですから、取引工場からの注文に^{こた}え、新しい技術を取り入れていくことは、大変なことです。

そこで、テクノセンターでは、これらの工場を助けるために新しい専門の知識や技術を教えたり、情報を伝えたりしています。

また、試験・計測技術を向上させるために、様々な試験・測定器を設置したり、工場の共同研究や技術の相談に^お応じたりしています。

さらに、テクノセンターでは、子どもたちに簡単な技術を教えたり、工作教室など楽しい催しを行ったりもしています。

この施設を建物として示すときは、「坂城テクノセンター」と書きます。



坂城テクノセンター



計測器の講習会

② テクノハート坂城協同組合

テクノハート坂城協同組合は、1992（平成4）年に町内製造業123社により設立され、坂城テクノセンターの中にあります。

ここでは、工場で働く人を確保するために、高校生・大学生の工場見学や体験学習のお手伝いをしたり、高校の先生との懇談会をしたりしています。また、工場で使う材料や備品を共同で買ったり、工場での仕事を見つけてあげたりもしています。さらに、町内企業の交流を図って町の工場を応援しています。



大学生の工場見学会

③ B.Iプラザさかき

Bはビジネス、Iはインキュベータ（事業を始める人の支援を行う組織のこと）を表しています。2002（平成14）年に開設されました。

B.Iプラザさかきでは、初めて工場を作ろうとする人や、新しい分野の工場の仕事を始めようとする人たちに対して工場施設を貸し、研究開発や会社経営をお手伝いしています。このようにして坂城町に新しい会社ができていきます。



B.Iプラザ

2 坂城町の農業

(1) 農業の特色



坂城町の農業は、花き栽培のほか、現在は果樹栽培が中心に行われています。

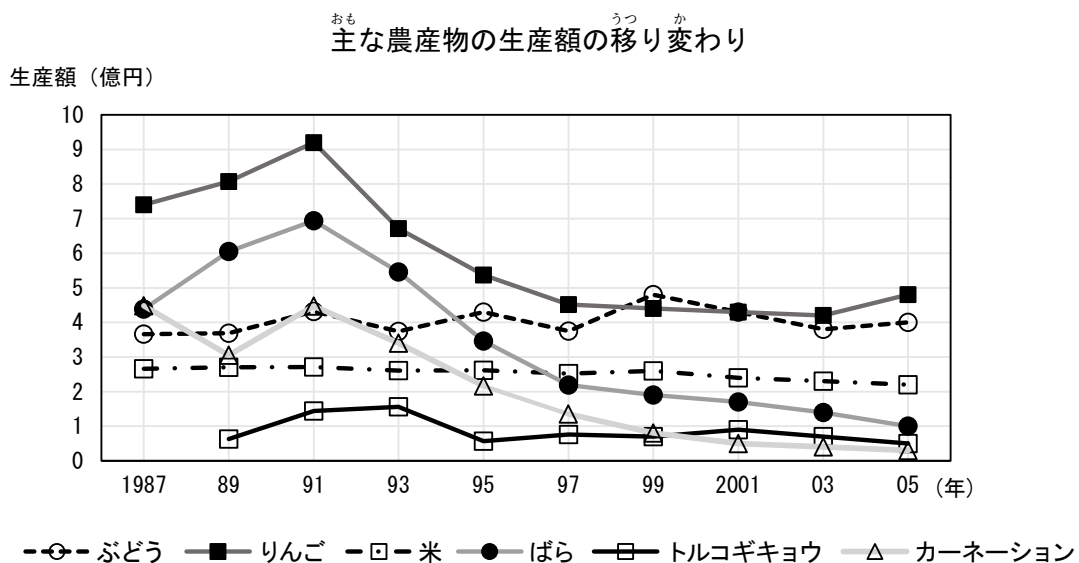
りんご・ぶどうの果樹栽培は、北日名や南日名、御所沢、四ツ屋などの日当たりのよい扇状地を中心に行われています。また、坂城町は雨の少ない地域で、昼と夜の温度差が大きいことから果樹栽培に適しています。りんごでは、ふじをはじめ、長野県オリジナルのシナノスイート、シナノゴールド、秋映などの新品種が作られ、ぶどうでは巨峰のほか、シャインマスカットやナガノパープルなど多様な高品質のぶどうが栽培されています。

千曲川流域の平らな土地を利用して上五明ではばらが、網掛ではトルコギキョウ・カーネーションが盛んに作られていましたが、今は大変少なくなっています。

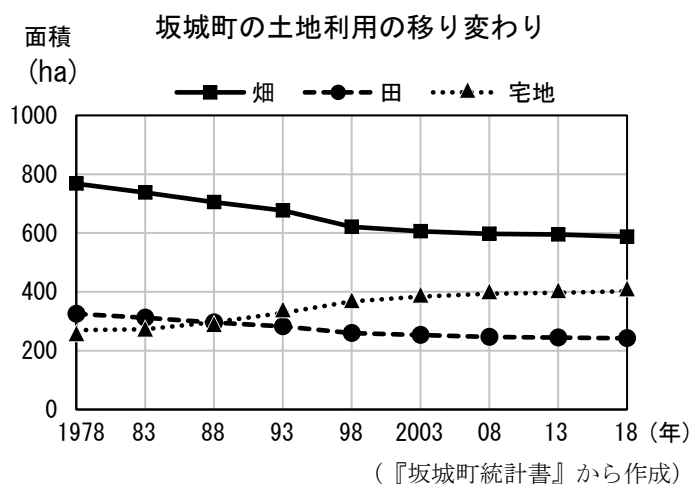
果樹や花き以外では、古くから地域の伝統食である「おしぼりうどん」の材料として親しまれてきた、ねずみ大根（中之条大根）の栽培も行われ、地域の特産品となっています。

坂城町の農産物は、市場やお店の人に味や色づきなどで人気があり、また産地としての信用があります。これは、栽培する人たちが、買う人の気持ちを考えて、よい作物を作ろうと研究を重ねてきたからです。

しかし、下のグラフからわかるように、代表的な農産物の生産額が減少の傾向にあります。なぜでしょうか。その理由を考えてみましょう。



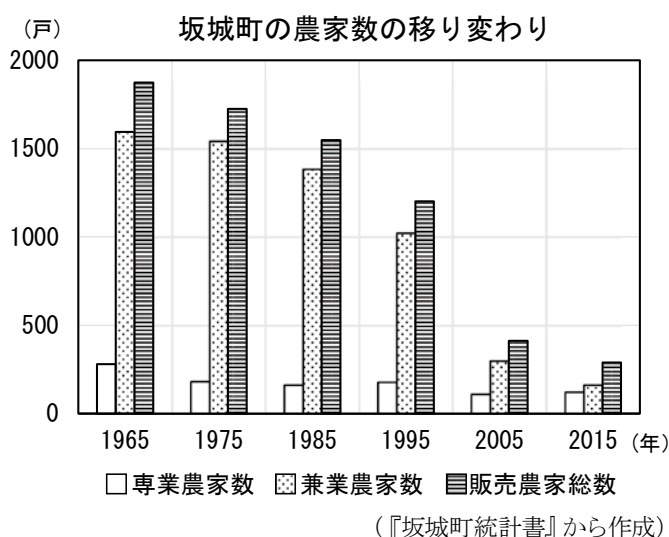
（『坂城町統計書』から作成）



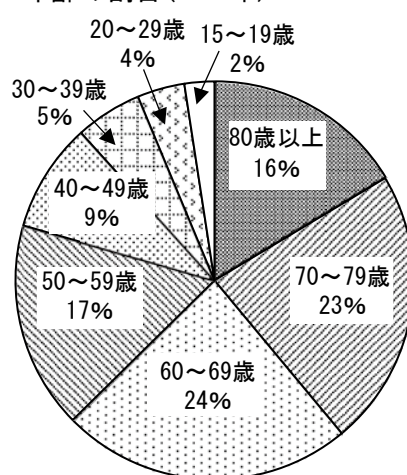
左のグラフは、坂城町の土地利用の移り変わりを表したものです。ここから、田や畑の面積が年々減ってきていることがわかります。反対に宅地面積が増えています。

左下のグラフを見てください。農家数も減ってきています。また、農業だけの仕事をしている専業農家は少なく、農業と農業以外の仕事をしている兼業農家が多いのがわかります。

さらに、右下のグラフからわかるように、農業の仕事をしている人の多くは50歳以上の人です。細かい作業や暑い日の作業はとても大変なことです。しかし、現在は草刈りや農薬の散布などの機械化も進んでおり、品質の高い農産物を短い時間で効率的に栽培しています。



坂城町で農業の仕事をする人の年齢の割合 (2015年)



(『坂城町統計書』から作成)

(2) 北日名・南日名のりんご

みなさんも知っているように、長野県はりんごの特産地で全国的に有名です。長野県全体で、年間13万トン（1トンは1000kg）ぐらい生産していて青森県に次いで、全国第2位の生産量です。

坂城町でも年間900トン以上のたくさんのりんごが作られています。坂城町で作られる品種の半分は、「ふじ」というりんごです。ふじは大きくてとてもおいしいりんごです。ほかには「つがる」「王林」などのほか、「秋映」「シナノスイート」「シナノゴールド」「シナノリップ」などの新しい品種や坂城町オリジナルの「夏乙女」も作られています。

坂城町で作られるりんごは大阪や北陸地方で評判がよく、たくさん出荷されています。坂城地区南日名のりんご農家、小宮山文敏さんにりんご作りの工夫についてお聞きしました。

「小宮山文敏さんのお話」

りんご作りでは、着色や味のよいものにするため、りんごのまわりの葉を摘んだり（葉摘み）、太陽の光がリンゴ全体に当たるようにりんごを1個ずつ少し回転させたりする（玉回し）ほか、下枝にも日が当たるよう、わい化（木を小さく育てる方法）に変えたり、甘みを出すために袋をかけないで作ったりなど、いろいろと工夫をしています。また、買ってくれる人が安心して食べられるように、消毒を減らしています。最近では、「シナノホッペ」という赤みの濃い新しい品種のりんごも作っています。

このように、坂城町のりんごが、全国の多くの人たちに喜ばれるよう、がんばっています。



りんごを収穫する小宮山さん

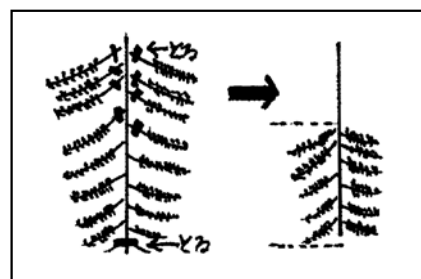
（3）巨峰作りの仕事

坂城町で作られているぶどうの4割は巨峰という品種です。巨峰は、種があるものとなることがありますが、最近は種のないものが多く作られていて、粒が大きく甘く、高級品として売れます。

しかし、巨峰作りの仕事は決して楽な仕事ではありません。成長にともなう高いぶどう棚に手を伸ばして行う作業や雨が降っても決められた時期に行う作業などをきちんとしないと、粒が大きくならなかったり、種なしのはずが種が入ってしまったりなど、売り物にならないことがあるからです。

① 房作り（房こき）の仕事

5月終わりごろになると、ぶどう一房にうす緑色の花のつぼみ（花穂）がたくさんつきます。このとき、収穫する房の形を考えて、右の図のように必要のないつぼみを取る仕事をしなくてはなりません。この仕事を房作りと言います。



必要のないつぼみを取る

以前は、ハサミを使って、房の中心の軸から分かれた軸を一段ずつ切り落としていましたが、1977（昭和52）年に四ツ屋の宮下忠さんがハサミを使わずに、指で軸をこき落とす「房こき」という新しい方法を考えました。この方法は、ぶどう農家や市場の人たちから受け入れられ、坂城町の技術として全県、全国に広がりました。この方法によって、房作りの手間が減り、できたぶどうの房の形もきれいで大ききのそろったもの（にぎり房）ができるようになりました。

しかし、新しい方法でも花は天候によっていっせいに咲いてしまうので、短い時間にたくさんの房こきをしなければなりません。

南条地区山金井の宮下登満夫さんのお宅では、宮下さんと家族が3か所の畑（45aほど）でぶどうを作っていますが、この作業のときには、家族以外の人にも頼んで4、5人ほどで仕事をします。

② 摘粒の仕事

7月になると、ぶどうの粒も大きくなります。このとき、摘粒という仕事をします。これは、一房のぶどうの粒を35粒前後にし、その重さも360g以上になるように、余分な粒をはさみで切り落とす仕事です。粒の数が多すぎると、粒が小さくなり色つきが悪く、甘みが出ません。この仕事も大変ですが、これがよいぶどう作りの決め手になります。

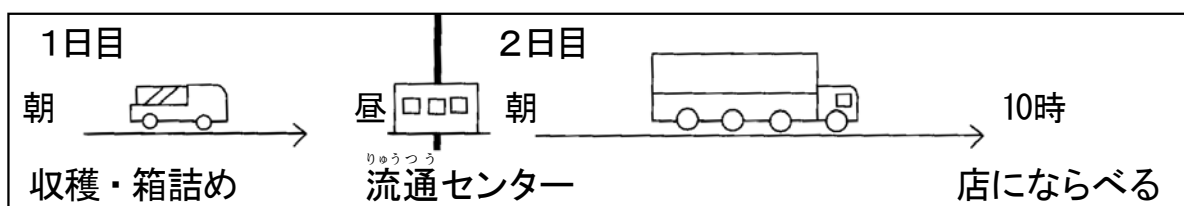
③ 巨峰の出荷

9月になると、巨峰の粒は紫色に色づき、収穫の時期になります。農家では、朝の4時か5時には起きて巨峰を収穫します。収穫された巨峰は、一房の重さを計ったり、大きさをそろえたり、色づきの悪いものや傷んだものがないか、一房一房ていねいに調べたりして箱やパックにつめます。そのとき、巨峰の新鮮さを示す粒の表面の白い粉を手で触って落とさないように気をつけます。箱詰めされた巨峰は、次のようにして店に並びます。



巨峰の重さを計る宮下さん

スーパーマーケットの店頭で並ぶまでの巨峰の流れ



「宮下登満夫さんのお話」

わたしが巨峰を作り始めたのは、1965（昭和40）年ごろです。初めてのことで指導員の先生に教えてもらったり、山から切ってきた木で仲間といっしょにぶどう棚を作ったりしたことを思い出します。

ぶどう作りは棚に手を伸ばしての仕事が多く、大変なこともあります。しかし、房作りのように自分の房の作り方でぶどうを理想の形に整えようという意欲が持てる仕事です。手がかかるけれど、それだけ、ぶどう一房一房に愛着が持て、収穫の時、ドキドキしながら袋を取ります。

(4) 新しい品種のぶどう

2006（平成18）年に品種登録されたシャインマスカットは、種なしで黄緑色の大きな粒のぶどうです。皮ごと食べられ、パリッとした歯ごたえの甘いぶどうで、子どもから高齢者まで幅広く人気があり、坂城町でも長野パープルとともに、最近は生産が増えています。

シャインマスカット作りは、6月の初めごろ花が咲き終わってから、ジベレリンという植物のホルモンの液を使って、開花と開花10日後ぐらいの2回、種なしの作業をしたり、粒を大きくしたりするための手間のかかる作業をします。また、巨峰と同じような房こきや摘粒の作業のほか、粒が大きくなってくると紙の袋とかさをかけて、病気や鳥からぶどうを守ったり、日よけをして粒の色を調整したりするなど、手間をかけて質のよいぶどうを作る努力をしています。



袋とかさのかかった
シャインマスカット



収穫まぎわの
シャインマスカット

(5) 斜面を利用したぶどう作り

千曲川をはさんで東側の斜面には、たくさんのぶどう畑があります。ぶどうは、日当たりがよく雨が少ない水はけのよい土地に適した作物で、坂城町の気候や地形はぶどう作りにはとても適しています。しかし、必要な時期に雨が十分降らないと粒の大きなよいぶどうはできません。そのため千曲川からポンプで水をくみ上げて、7月から8月の初めまでは、スプリンクラーでぶどう畑に水をまいています。このような工夫をして坂城産のおいしいぶどうが栽培されています。



スプリンクラー

(6) 「長野ローズ」のばら

かつて東京の大きな市場には、坂城町のばらがたくさん出荷されていて、そのほとんどが村上地区でビニールハウスや大型ガラス温室などで育てられていました。しかし、今では、村上地区でばらを作っている人は、様々な理由で少なくなっていました。

そのような中で、今もいろいろな努力をして、ばらの栽培と販売に励んでいる上五明の有限会社「長野ローズ」の社長、竹内栄一さんにお聞きしました。

「竹内栄一さんのお話」

わたしの会社は、1966（昭和41）年に父が設立したものです。父は1950（昭和25）年に露地（おおいのない土地）でばら栽培を始め、ビニールハウスや大型ガラス温室による施設栽培で、切り花用のばらをたくさん出荷していました。しかし、ほかの地域でもばらを作る人が増えて競争が激しくなったり、切り花の需要が少なくなってきたり、ばらを育てるための設備や燃料に費用がかかったりして、ばらを栽培するのが大変になってきました。



ばらの苗を育てる竹内さん



たくさんの品種のばらの苗

わたしは、今の会社に入社し、そのような様子を見てきて、2000（平成12）年に「ザ・ローズショップ」を開き、インターネットでの通信販売を始めました。

インターネットでの切り花主体の売り上げは、最初は少なく経営が大変だったのですが、庭でばらを育てて楽しむ家庭が増えてきて、切り花よりもばらの苗の売り上げの方が、伸び率が高いということがわかってきました。そこで、ばらの栽培・

販売を切り花用から苗にかえ、たくさん売れるようになりました。お客さんから喜びの声やメールをいただいたとき、ばら作りを続けていてよかったと思います。

しかし、最近は、インターネットでの販売をする会社も増え、競争も激しくなっているので、高品質なばらや長野ローズのオリジナルのばら品種を作り、多くの人にばらを育てる喜びや咲かせる感動を楽しんでいただければと思っています。

（7）伝統野菜のねずみ大根

ねずみ大根は「なかんじょ（中之条）大根」とも呼ばれ、江戸時代に長崎から伝えられたと言われています。中之条地区を中心に栽培されてきました。大根の首の部分から下がねずみの形に似ていることから「ねずみ大根」と名付けられました。

ねずみ大根の栽培には、日当たりがよく水はけのよい小石が混じった土が適しているとされ、扇状地の畑の多い坂城町は、ねずみ大根栽培に適しています。

ねずみ大根は、辛味が強く、大根のしぼり汁にみそやかたお節、ねぎなどを入れ、かまあげうどんをつけて食べる「おしぼりうどん」として使われるほか、たくあんやおやき、ドレッシングなどにも利用されています。



ねずみ大根

ねずみ大根は坂城町の伝統野菜ですが、農家がねずみ大根を作って、その種を採ってまた育てるということを繰り返すうちに、ねずみ大根の本来の形や特徴が変わってきてしまいました。

そこで、ねずみ大根を守ろうと、1999（平成11）年に、「坂城町ねずみ大根振興協議会」ができ、ねずみ大根の本来の特徴を出せるよう品種改良を重ね、5年がかりで実現することができました。ねずみ大根を坂城町の特産品として守るため、ねずみ大根の種は、協議会の会員以外には販売していません。また、種がほかの地域で採れないよう、出荷のときには、葉をすべて切り取ったりするなど、品種を守る取り組みは今も続いています。

（8）6次産業化

最近では、ワイン用のぶどうを栽培し、専用の工場（醸造所）でワインを作って販売したり、レストランを開いたりする取り組みも始まっています。

このように、農林水産業（1次産業）を仕事としている人が、農産物や水産物の生産だけでなく、それを食品として加工し（2次産業）、流通や販売（3次産業）にも取り組み、農林水産業を活性化させ、地域の経済を豊かにしていこうとする新しい産業を、「6次産業化」（1次産業×2次産業×3次産業＝6次産業化）と呼んでいます。

町では、「坂城町ワイン」のブランド化（名前が知れわたるような有名な商品にすること）を目指し、このような取り組みを支援し、町全体でワイン産地としての発展を図っています。



おしぼりうどん



ワイン用のぶどう



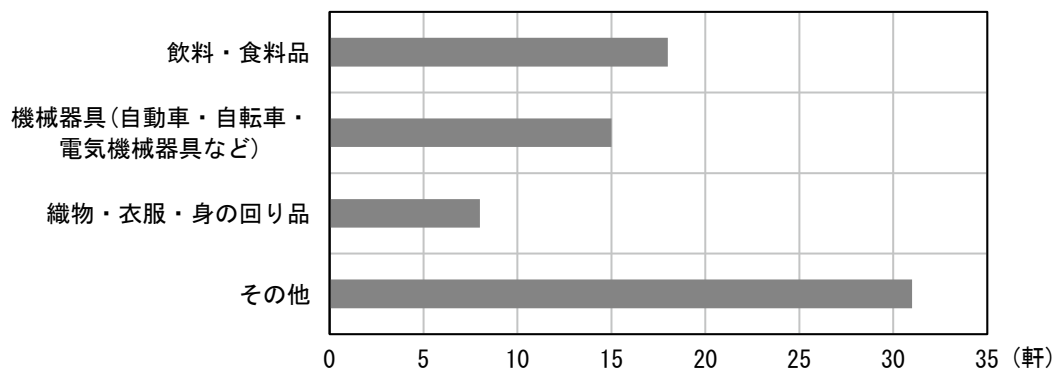
ワインの醸造所

3 坂城町の商業

(1) 種類別の店の数

みなさんも坂城町にある店で買い物をしたことがあると思います。下のグラフからわかるように、坂城町には、73軒ほどの店があります。中でも、毎日の生活に欠かせない食べ物の店が一番多いですね。

坂城町の種類別商店数（小売業のみ 飲食店を除く 2014 年）



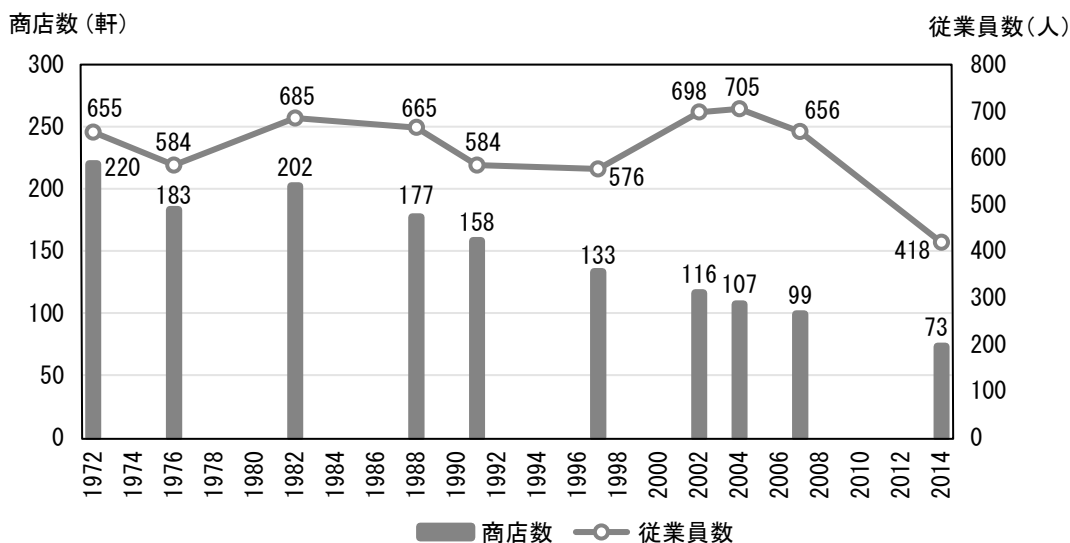
(『坂城町統計書』から作成)

(2) 店の数と働く人の数

下のグラフからわかるように、1982（昭和 59）年以降、店の数は減ってきています。いろいろな物を売る大きな店が町内にいくつかできたときは、従業員（店で働く人）が増えましたが、店が閉じたり規模が小さくなったりしてからは、働く人も減ってきています。

坂城町は、店がおよそ 2500 軒ある長野市や 1000 軒ある上田市には生まれ、しかも町外の交通の便利な所に大きな店がたくさんできたため、町外に買い物に出かける人が増え、町内の店を利用する人が減ってきています。

坂城町の商店数・従業員の移り変わり（小売業）



(『坂城町統計書』から作成)

(3) 坂城駅^{えき}の周り^{まわ}にある^{しょうてん}商店^{ようす}の様子

坂城町の中でも、坂城駅の周りにはいくつかの店があります。坂城駅を出ると、東に向
 かって横町・田町の商店が、北に向かって立町・昭和通りの商店があります。

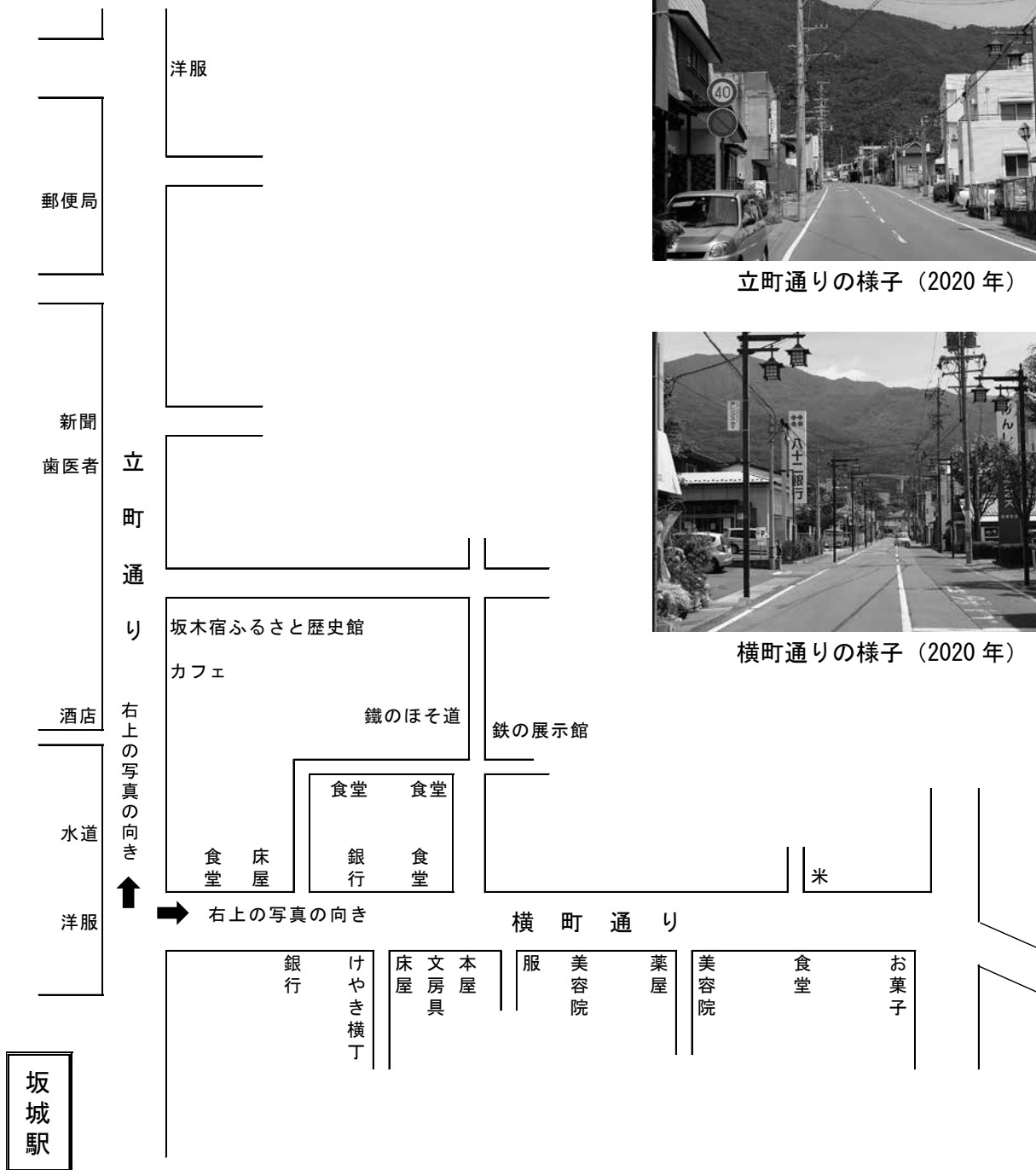
かつては、今よりもたくさんの店が^{あつ}集まっていた、駅前商店街と呼ばれていました。しかし、昔より店が^{むかし}だいぶ減ってきてしまいました。



立町通りの様子（2020 年）



横町通りの様子（2020年）



(4) 薬屋の様子「日野屋薬局」

横町に古くからある薬屋を紹介します。店に行ってみると、店の前ににぎやかに並べられた商品がすぐ目にとまります。店の人に仕事の様子や工夫をたずねてみました。



日野屋薬局

① 店の始まり

1921（大正10）年から、今の店長のおじいさんが薬の販売を始めました。そのころは、今より薬屋の数が少なかったそうです。

② 仕事の様子

ア 開店している時間は、朝8時から夜8時までで、日曜日は休みです。けれど、それ以外の時間でも急に具合が悪くなって店に来る人のために、店を開けることがたびたびあります。

イ 忙しい時間は、午前中と夕方です。病院に行った人が薬を取りに来たり、仕事帰りの人が買いに来たりすることが多いからです。

ウ はにしな寮やさかき美里園などの施設や高齢者のお宅へ薬を届けています。

エ 「たなおろし」といって、一年に一度、店にある薬や化粧品、雑貨全部の品名と数量を調べる仕事があります。とても大変な仕事です。

③ 店の工夫

ア 季節にあった商品（夏は虫さされの薬、冬はカイロなど）や、売り出しの商品を店の中の特設コーナーに並べて、人の目につきやすくしています。

イ すすめたい薬やたくさんのお客さんが求めている薬は、目立つようにその薬の値段やききめをカードに書いて掲示します。

ウ お客さんに売り出し商品の紹介を書いたはがきを出します。

エ 自分の店の「ぴょんちゃんカード」を作り、店にくる人の楽しみにしてもらっています。



ぴょんちゃん（メンバーズ）カード

④ やりがいのある仕事

薬屋（薬局）の仕事は、休みの日でも、夜遅くても具合が悪くなった人が訪れるため、休みがないようなものです。けれど、こうして地域のみなさんの役に立てることに、とてもやりがいを感じます。

(5) 坂城町のにぎわいを目指して

① 商工会の仕事

ア 商工会ってなあに

商工会は、店や工場の仕事をしている人たちが困ったときに相談にのったり、助けたりする仕事をします。それだけではなく、決まった時期に店や工場を回ってアドバイスをしたり、経営に必要な知識や技術などを知らせるため講習会を開いたりしてくれます。

また、坂城駅周辺の区域をはじめ、坂城町にたくさんの人に訪れてもらうための事業や工業・商業の催し物の開催、商品券の販売などを通じて、地域（まち）の活性化を進めています。



坂城町商工会館

イ 盛り上がる「ふーど市」

商工会が主催する「ふーど市」は、毎回たくさんの人々が集まって大変盛り上がります。地元の商店を中心に野菜や果物、肉類などの生鮮食品や、お菓子、焼きとり、飲み物、手作り雑貨などをまとまって販売する催し物で、坂城駅前や鉄の展示館前、文化センター周辺などいろいろな場所で開いています。品物の販売だけでなく、スタンプラリー抽選会など大勢の人が楽しめる様々なイベントを行っています。



ふーど市

ウ 新しい取り組みの「まちゼミ」



「得するまちのゼミナール」のチラシ

2018（平成30）年からは、町の商店が地域の人に愛される店づくりを行うため、店の人が講師となって、包丁の研ぎ方、スーツの手入れ、タルタルソースの作り方など、専門店ならではの専門的知識や情報、コツを無料で楽しく教えてくれる「得するまちのゼミナール」という少人数制のミニ講座を商工会が開いています。このことによって、地域の人に店のことを知ってもらうとともに、会話の中で地域の人々の声を聞いて店の経営に生かしていくことに役立てています。

② 坂城町中心市街地のまちづくり

坂城駅の周りは町の玄関口であり、坂城町発展の中心としての役割を持っています。この駅前商店（昭和通り・立町・横町・田町）をたくさんの人々に利用してもらうことは、町の発展のためにとても重要なことです。

町では、立町通りの旧坂木宿本陣跡、表門の修復とともに、本陣を勤めた旧宮原家の敷地に建てられた、旧春日邸（昭和初期の木造3階建）を活用し、2005（平成17）年に「坂木宿ふるさと歴史館」をオープンしました。ここでは、歴史資料の展示のほかに、毎年2月から2か月間、坂城町内外に残る昔からのひな人形を展示し、お客さんを集めるようなイベントも行っています。

たくさんの人々が利用する坂城駅は、2004（平成16）年全面改装されて、絵などを飾るギャラリーも整備されて利用する人々を喜ばせています。2016（平成28）年には、エレベーターが設置され駅がさらに使いやすくなりました。冬の駅前イルミネーションの点灯や169系電車を活用した様々なイベントが行われ、町内外から訪れる人々に楽しんでもらっています。



ふるさと歴史館のひな人形の展示



駅前イルミネーション

③ 商業インキュベーター施設「けやき横丁」



けやき横丁

「けやき横丁」と名づけられたこの施設は、新しく店を開こうとする人たちのために、部屋を貸し、実際にお客さんを相手に商売をしてもらい、商業の基本を学んでもらうものです。このけやき横丁で経験したことを生かして、いずれは自分の店を持ち、坂城町に新しい店ができることをねらっています。